

2. 留学生相談部門

留学生相談部門の主な活動対象は、1) 一橋大学に在籍する留学生、2) 留学生の支援や交流を希望する日本人学生、及び3) 留学を希望する日本人学生である。1998年度の留学生相談部門の業務は、留学生相談部門教官（横田雅弘）と留学生センター兼務で学部にも所属する留学生専門教育教官（西谷まり・水野治久：西谷は日本語教育部門と兼務）ならびに社会学部教官（田中宏）が担当した。

留学生相談部門が提供する教育サービスは、1) 学生の相談に応じ、問題解決を図る「相談活動」と、2) 学生の適応上の問題を未然に防いだり、異なる文化への認識を高めていく「予防・開発的活動」の二つに分けられる。相談活動の中心は、カウンセリングである。カウンセリングには、治療的な面接から情報提供まで幅広い活動が含まれる。予防・開発的活動には、a) オリエンテーション・プログラムやチューター・マッチングなどの留学生の異文化不適應を予防する活動、b) 見学旅行、授業など、留学生の日本の文化や社会への理解を促す活動、c) コミュニティによる生活支援を促進する活動、d) 学生国際交流誌『Bridges』の編集、日本人学生のための留学フェアの開催、学生や地域社会を対象とした講座の運営など、日本人学生や教職員に異文化交流の面白さとその意義を訴えていく活動がある。

1. 相談活動

1) 留学生相談室の時期、時間及び担当者

夏学期（4月1日～7月31日）及び冬学期（10月1日～99年2月5日）の月曜日～金曜日の午前10時～午後1時、午後2時～午後5時（水曜日・金曜日の午後は閉室）に留学生相談室を開室した。なお、夏期休暇中（8月1日～9月30日）及び春期休暇中（2月6日～3月31日）は相談室を閉室したが、相談担当者の研究室で相談を受け付けた。表1は相談室担当者の一覧である。

表1 相談室担当者の一覧

曜日	10時～13時	14時17時
月	横田雅弘	横田雅弘
火	水野治久	水野治久
水	横田雅弘	（閉室）
木	水野治久	西谷まり
金	田中宏	（閉室）

表2 1998年度の月別の来談状況*1

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計	構成比(%)
修学	54	18	21	22	7	3	34	15	14	18	4	6	216件168名	28.73
チューター	15	11	26	9	0	0	19	22	0	0	0	0	102件 98名	13.56
経済	28	7	0	0	0	0	37	0	4	6	4	4	90件 81名	11.97
人間関係	14	9	11	2	2	0	8	11	8	3	3	0	71件 36名	9.44
行事申込み	0	0	0	16	0	0	11	12	13	6	0	0	58件 58名	7.71
生活	3	9	5	4	0	0	1	6	2	8	1	1	40件 34名	5.32
呼出面接	0	28	1	0	0	0	1	3	2	0	0	0	35件 35名	4.65
在留資格	5	1	5	2	0	0	7	2	2	2	0	0	26件 20名	3.46
言語	6	4	5	0	0	0	2	1	3	1	1	1	24件 20名	3.19
オリエンテーション	14	0	0	1	0	0	6	0	0	0	0	0	21件 21名	2.79
健康	0	0	0	1	4	4	0	0	7	0	0	0	16件 3名	2.13
留学相談	0	0	0	2	0	0	1	0	4	2	0	0	9件 9名	1.20
その他	6	4	6	5	0	0	12	5	4	2	0	0	44件 35名	5.85
合計	145	91	80	64	13	7	139	77	63	48	13	12	752件618名	100

表3 752件の来談者の内訳

種類	件数	構成比(%)	
留学生*	学部生	347	46.13
	研究生	109	14.49
	修士課程	54	7.18
	博士課程	19	2.53
	留学生センター	66	8.78
	所属不明	41	5.45
日本人学生	76	10.11	
教職員	22	2.93	
学外	6	0.80	
不明	12	1.60	
合計	752	100	

*留学生の相談件数の合計は636件(84.56%)

2) 来談状況の分類

表2は1998年度の来談状況の分類である。一年間で752件の相談(618名)を受け付けた。来談者の内訳は、表3のとおりである。752件中、留学生からの相談は636件(84.56%)、日本人学生からの相談は76件(10.11%)、教職員からの相談は22件(2.93%)、学外からの相談は6件(0.80%)、不明は12件(1.60%)

*1 相談分類は、松原達哉・石隈利紀「外国人留学生相談の実態」『カウンセリング研究』(26巻,50-59頁,1993)、井上孝代・伊藤武彦「留学生相談の実態と課題—全国高等教育機関の調査から—」『学生相談研究』(19巻,22-32頁,1998)の留学生相談室の来談状況の調査と同じ項目を使用した。このほかに文化の問題という項目があるが相談事例がないので割愛した。「チューター」、「オリエンテーション」、「行事申し込み」、「留学相談」は本学独自の項目である。

であった。

① 相談領域

相談が一番多かった領域は修学の問題（28.73 %）である。これには、履修科目の選び方、履修手続き上の質問、勉強の方法、進路相談が含まれる。次に多かった領域にチューターに関連する問題（13.56 %）がある。相談室では、主に学部留学生にチューターを紹介している。一年間で約 40 名の留学生にチューターを紹介した。大学院所属の留学生には、所属するゼミナールでチューターを紹介してもらうように指導している。なお、この領域にはチューターに関する相談も持ち込まれ、一年間で 13 件のトラブルがあり、チューターや留学生への指導、チューターの変更を行った。

次に多かった領域は、経済の問題（11.97 %）である。これには、奨学金やアルバイトなどの相談、奨学金申請のための推薦状執筆の依頼、アルバイト（資格外活動許可申請）のための副申書記入の依頼が含まれる。

逆に相談が少なかった領域は日本人学生の留学相談（1.20 %）である。相談が少ない理由として、1）留学生の来談が多く物理的に日本人学生に対応できない、2）日本人学生への広報不足が考えられる。今後の課題としたい。

② 相談者の内訳

相談者の 46.13 %が学部留学生である。学部留学生は日本社会への適応問題とともに、発達的な課題を抱えており、それが、来談者数の違いとなって現れてきた可能性がある。次に多いのが、研究生（14.49 %）と留学生センターの日本語研修生（8.78 %）である。研究生の多くは、大学院に入学することを前提としている。その意味で研究生の期間は大学院への入学準備期間であり、解決すべき課題も多いのではないかと推測できる。また、日本語研修生は予備教育課程のため、日本語の力を養うと共に、専門教育へとスムーズに移行する必要がある。このことが来談の背景にあるのかも知れない。

一方で、相談者に占める大学院修士課程及び博士課程の留学生の割合は、9.71 %と少なかった。来談件数は少ないものの、学業や生活の上で、深刻な問題を抱えている例もある。祖国から呼び寄せている家族の相談もある。今後は、こうした大学院留学生への援助サービスのあり方について、検討する必要がある。

なお、相談室には留学生、日本人学生の他に、教職員（22 件：2.93 %）と学外（6 件：0.80 %）からの相談もあった。教職員 22 件については、留学生の問題で教職員と連携をとったケースが含まれる。具体的には、修学の問題では指導教官との連携、留学生に健康上の問題（精神疾患の疑いも含む）が認められる場合に

は保健管理センター医師との連携がある。また、数は少ないが留学生への対応に関する教職員からの相談もあった。

③ 相談の時期

相談の時期をみると、4月(145件:19.28%)と10月(139件:18.48%)に集中している。この時期は、入学したばかりの新入留学生からの相談が集中する。逆に相談件数が少ないのは8月(13件:1.73%)、9月(7件:0.93%)の夏期休暇中、2月(13件:1.73%)・3月(12件:1.60%)の春期休暇中である。しかし、この時期は、帰国や進学、卒業の問題に関連した相談が持ち込まれている。問題が深刻化する前の予防的アプローチの開発が今後の課題である。

752件のうち62件が新入留学生を対象に実施した呼び出し面接で、そのうち27件は問題が認められ援助的な関わりを行った。

2. 予防・開発的活動

1) オリエンテーション・プログラム

4月及び10月入学の学部生、研究生、交流学生、日本語研修生を対象にオリエンテーション・プログラムを行った。なお、オリエンテーションに欠席した留学生については、留学生相談室で個別にオリエンテーションを実施した。個別のオリエンテーションを受けた留学生は21名である。

2) 学内異文化交流誌『Bridges』編集

『Bridges』9号(編集長:西谷)及び10号(編集長:横田)を編集した。9号の特集は「プロフェッショナルを目指して大学院へ」、ゼミナール特集は経済学部地域経済ゼミナール(加藤博ゼミナール、谷口晉吉ゼミナール、佐藤宏ゼミナール)、10号の特集は「我々の中国 by 中国人留学生」、ゼミナール特集は社会学研究科田中宏ゼミナールであった。

3) 学内留学フェア

日本人留学希望者へのガイダンス及び協定校紹介を目的とした留学フェアを5月27日(水)に学内において実施し、約100名の日本人学生が参加した。交流協定校の紹介は交流学生及び帰国留学生が担当した。なお、学外からHEC経営大学院日本事務局太田垣みどり氏、カリフォルニア大学東京スタディセンター梶晶子氏を講師として招いた。

4) 留学生日本探訪旅行

2泊3日の「留学生日本探訪旅行」を企画・実施した。8月に広島（10名参加・ホームステイ実施・引率者:西谷）、3月には奈良（15名参加・ホームステイ実施・引率者:横田）、東北（30名参加・引率者:西谷）、京都（30名参加・引率者:水野）を実施した。

5) 留学生理解のための基礎講座

留学生を支援している学内の日本人学生や教職員、地域のボランティアを対象に「留学生理解のための基礎講座」を実施した。その講演録を『一橋大学留学生センター教育研究シリーズ 3 留学生理解のための基礎講座』として刊行した。なお、講演のテーマ及び講師は以下のとおりである。

表4 留学生理解のための基礎講座の演題と講師一覧

演題	講師
世界・日本・一橋大学の留学生	横田雅弘
留学生のカウンセリング	水野治久
私を変えたアジア人留学生との出会い	田中 宏
留学生にボランティアとして日本語を教える	五味政信

6) 「くにたち地域国際交流会」との協力

「くにたち地域国際交流会」が実施している外国人のためのサポート活動（日本語講座、ホームステイ・プログラム、生活相談等）に協力した。

7) 授業

相談部門にかかわる教官が担当した授業は、以下の通りである（日本語科目は除く）。

①日本語研修コース

科目名（担当者）	コマ数	対象	授業内容	時期・時間数
日本の社会と文化 ～異文化発見セミナー～ (横田・水野)	2コマ/週	日本語研修生	講義や体験学習、見学などを通して日本社会の理解を深め、あわせて日本文化への適応スキルを習得する。	4月コース 10月コース 各64時間

②教養教育科目

科目名(担当者)	コマ数	対象	授業内容	時期・時間数
外国人留学生社会科学ゼミナールⅠ(水野)	1コマ/週	学部1・2年の留学生	日本人論に関するテキストを購読し、日本人・日本社会について考え、あわせてレジュメ作成や口頭発表のスキルを習得する。	夏学期 30時間
外国人留学生社会科学ゼミナールⅡ(水野)	1コマ/週	学部1・2年の留学生	異文化接触場面の調査体験を通じて、データのまとめ方、発表の方法等を学習する。	冬学期 30時間

③学部教育科目

科目名(担当者)	コマ数	対象	授業内容	時期・時間数
比較文化経験論Ⅰ(横田)	1コマ/週	主に学部生	「差別と偏見」と「異文化コミュニケーション」のテキストをグループKJ法を用いてまとめ、発表する。	夏学期 開講 30時間
比較文化経験論Ⅱ(横田)	1コマ/週	主に学部生	自分にとって異文化である対象と接触し、その体験を異文化理解ワークショップに組み立てて実施する。	冬学期 開講 30時間

(水野 治久)